

「実践事例集Vol.15」(2018年4月発行)で
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>

—科学する心を育てる—

《自ら考え、最後まで
やりぬく子どもをめざして》
～「やってみたい」「最後までしたい」と、
思う環境と保育者の役割～



奈良市立六条幼稚園

1 はじめに

ネットやコンピューター社会、情報化社会となり、子どもを取り巻く環境も大きく影響している。子どもの遊びの場でも、空き箱で携帯電話やパソコンをつくり一人で黙々と遊んでいたりと、すぐに違う遊びに移ったりする姿がある。子どもたちの遊びや生活の中で、じっくりと取り組み、夢中になって遊んだり、ワクワク・ドキドキしたりする感動や感情の体験が少なくなってきた。子どもや保育者がワクワク・ドキドキする気持ちを持って、もの・ひと・ことにかかわり、心が揺れる体験をたくさんすることが大切であると考え、「科学する心」にどのようにつながっていくのか、考えたり、試したり、調べたりしながら、自分で行動を起こしていく子どもの姿を追ってみた。

2 「科学する心を育てる」についての考え方と取り組みについて

本園では、昨年度より《自ら考え、最後までやりぬく子どもをめざして》をテーマに「やってみたい」「最後までしたい」と思えるような環境と保育者のかかわりを探ってきた。

保育者が心を動かし、子どもが自ら気付く環境を構成していくことが大切であるということ学び、保育者がしっかりと【見る・知る・聞く】という意識を持ち感覚と感性を高めていく必要があると感じた。

今年度の4月に子どもの実態を見据え、職員間で保育と環境の見直しを図る中で「保育者として、しっかりと責任を持たなければいけないのでは……。かかわりの言葉よりも役割の言葉の方が保育者の意思が強調されるのではないか」という意見や「やってみたい。最後までしたい。と思えるではなく、もっと、子ども側にたって思うにしたらどうだろうか」という職員の強い気持ちをサブタイトルに出そうと意思統一していった。

そんな頃に、私たち保育者の心が揺れる4歳児A子の姿があった。

心が揺さぶられた瞬間！！

入園当初のA子は「ゲームがないから、幼稚園おもしろくない」と言って登園しても保育室に入るのを嫌がり、一人で帰ろうとしていた。担任及び園長・副園長たちが、A子の思いを聞きながらかかわっていた。

4月中頃、運動場で遊んでいた時、A子はドングリを見つけた。「このドングリ、なんか、音がする！」と言いながら、耳のそばでドングリを振っていた。季節外れのドングリが、水分が無くなり乾燥していることで、中身に隙間ができカラカラ・コロコロと音が鳴っていたのだ。保育者は、A子の様子を見守っていると、今度は、A子は手を止め「何が入っているのかな～」とつぶやいた。「A子、開けてみたくなっちゃった。どうやったら、開けられるのかな～」と言うと、近くにあった砂場用のスコップでたたき始めた。「開かないね～??」そう言うと、もう一度手に取り、「何が入っているのかな～?」ドングリを見つめ考えている様子。「わかった！！小さいリスさんがいるんじゃない?!」目をまんまるくして、ニコニコと嬉しそうに、少し大きめの声で他児に聴こえるように言った。それを聞いていた5歳女兒が「これでたたいたらどうかな?」と、ままごとで使っているフライ返しを持って来て、一緒にたたいたり、転がしたりしていた。随分、楽しそうに長い間していたので周りの子どもたちもだんだんと人数が増えてきた。

A子は、この頃から「ダンゴムシさんいるかな」と笑顔で登園してくるようになった。



A子のこの姿を通して、私たち保育者の役割は、子どもたちが、日常の疑問や不思議に共感し、それを深める援助ができるよう環境を整えていくことで、子どもの好奇心や探求心が持続していくのではないかと考えた。子ども自ら心を揺さぶられている姿をありのまま受け止めることこそが大切である。「科学する心を育てる」というのは頭の中で考えたり調べたり、聴いたりして知識を増やしていくことだけではない。身近なもの・ひと・ことにじっくりかかわり、触れ、感じ、考えながら心と体で感じとり、心と体で表現していく中で得ていくものこそが「科学する心を育てる」と考えた。

3 実践事例

4 歳 児

保育者の役割・環境

事例① 振ったら色がでるよ (5月下旬)

5歳児がペットボトルに色水をつくっている所を見て「これ何?」「何してるの」「すごい。おもしろそうや」「どうやってするの?」「僕もしてみたい」と、興味を持ち保育者と一緒してみる。5歳児の姿を見たり真似をしたりして遊べるように、ペットボトル、すり鉢、すりこぎ、パンジー、ツツジ、ウメ、ヤマモモなどたくさん用意しておき、遊べるようにした。5歳児がすり鉢と



すりこぎを使い、丁寧に色を出している。「わあ、きれい」「ピンク色や。すごい」と、驚いている。「ここに水入れてた」「この花や」と、同じ道具や花を使い自分なりに真似をして作りはじめる。「なんかできない」「どうするの?」と、保育者と一緒しながら道具の使い方や作り方を一緒に試していく。「できてきたね」「何ができるかな」「お兄ちゃんたちみたいやね」と、遊びが楽しくなるような声をかけ、一緒にやってみるが、花びらや、まだ緑のヤマモモは硬くてうまく潰すことができない。ジョウゴで入れようとするが、花びらやヤマモモが詰まりうまく入らない。保育者は、どうするのかと見ていると、ジョウゴを使わずに手でペットボトルに入れている。「先生できた」「もっとつくる」と、自分でペットボトルを持ってきて、たくさんつくろうとしている。次は、ジョウゴを使わず、先にペットボトルに水を入れ草花や

ヤマモモを入れていく。色水を何本もつくることを楽しみ、「ほら見て。できたよ」と、たくさんの実が入ったペットボトルを保育者に見せて、上下に振っている。「振ったらできる」「振ったらな、色が出るよ」「見ててね」と、一生懸命に振り「ね、色が変わったやろ」と、嬉しそうに保育者や友達に見せては話している。「振ったらできる?」「振ったら色が出る」という発想



を子どもが考えたこと、発見したことに共感し「そうなの」と認め、保育者も試し「ほんとうね。色変わったね」と、子どもと一緒に喜び、感激した。次の日も、同じ作り方で、何本もつくることを楽しんだ。他の子どもたちも、「つくりたい」と集まり、真似をして花びらを入れては振りを何度も何度も繰り返し楽しんだ。

【プロセス】

興味・関心

好奇心

くじけそう

励まし・共感

再アタック

成功

満足感
新しい
興味・
関心

おもしろ
いからし
たい

先生が
見てく
られる
かな

こうしたら
どうなる
かな。や
ってみ
よう。

できた。
感激
感動

もっと
したい

《考察》

5歳児の様な色水をつくりたいという思いを大事にしながら、4歳児なりの遊び方やしたいことを保

育者が十分に受け止め自分たちで選べるように、豊富な材料を準備し、満足できるようにしてきた。

その子なりの工夫をしたことに思いを受け、「もっとつくりたい」「振ったらできる」と、いうことに励ますことで、自分の色水をつくり「自分でできた」「自分でつくった」という気持ちになった。

子どもができないと戸惑い、あきらめかけている時に、保育者の「もう少し、一緒にやってみよう」というひと押しが必要である。励ましや共感・認めることが次のステップへとつながると思った。

事例② 重たいからや (11月)

1学期、5歳児の転がし遊びと一緒に入り遊んでいた。一緒に遊ぶ中でトイのつなぎ方やビンケースの使い方を教えてもらい4歳児だけでコースづくりを始める姿が見られるようになってきている。

「先生、見て。できたよ」と自分たちでできたコースを喜んでいる。

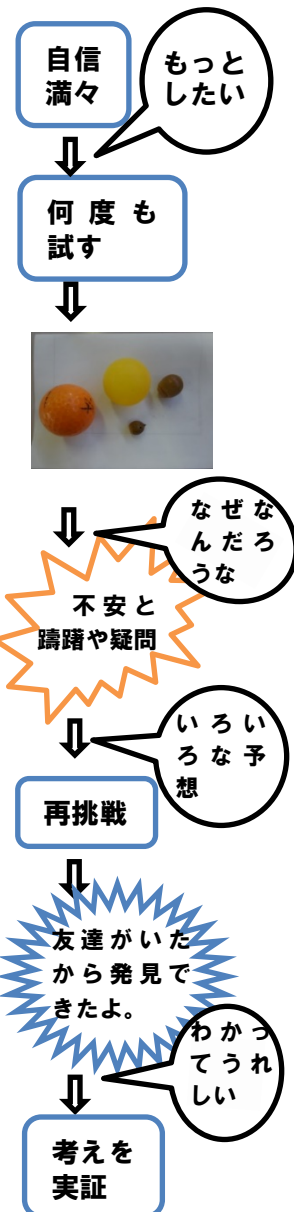
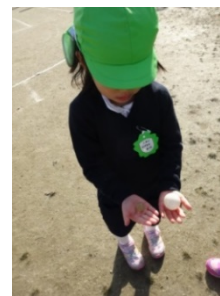
「お兄ちゃんたちがいなくてもできたね、すごい！」とできた喜びに共感する。



「いろいろなもの転がしてみよう」とA児がゴルフボール、ピンポン玉、スーパーボール、様々な形のドングリを持って来る。一緒に遊んでいたB児がドングリを転がしてみる。「こっちの大きい丸いドングリは転がるけど、こっちの小さいドングリは止まってしまう。」みんなもやってみるができなかった。「なんでだろうね」と一緒に考える。

「小さいから転がらない」A児が言う。「じゃあ一番大きいボール転がそう」とゴルフボールとピンポン玉を持って来る。転がる様子を一緒に見守る。2つとも最後まで転がったがスピードが違うことに気付く。「ゴルフボールの方が早く転がったなあ」、「おんなじ大きさなのに」とA児、B児や数人が集まる。「大きさ一緒なのに違ったね、何が違うのかな」と子ども達の疑問に共感しながら問いかける。

保育者の問いかけにピンポン玉とゴルフボールの2つのボールを片手ずつ持っていたC児が「ゴルフボールの方が重たい！」と重さの違いに気付く。一緒にいた子どもたちが順番に持ってみて「ほんとうだね」、「重たい方がよく転がるよ」と発見する。「じゃあ、ピンポン玉とスーパーボールもやってみよう」とピンポン玉とスーパーボールを転がし、「スーパーボールの方が小さいけど早く転がった」と気付いたことを試してみても自分たちの思いと一致したことを喜びあった。



《考察》

“まるいものは転がる”ということは遊びの中で何度もしているうちに気付いていた子どもたちだったが、さらに遊ぶ中でよく転がる物と転がりにくい物があることに気付く。最初は、大きさの違いと考えて転がすが、同じ大きさでもスピードが違う、ゴルフボールの方が勢いよく転がり、大きさの違いだけではないことを発見する。偶然ゴルフボールとピンポン玉を片手ずつ持っていた子どもが重さの違いを発見し、大きさではなく重さで違うことを新たに気付いた。自分たちの想像通りの結果がでて感動したことは、さらに次の挑戦となり、いろいろなものを試そうとする意欲にもつながっていった。

事例③ **こっちの方が、よく凍るぞ** (1月)

3学期が始まり、登園時に草木が白くなっていることや水たまりが凍っているのを見つけ「これ『霜って言う』ってお母さんが言ってた」「ガラスみたいやな」と話す姿があった。「水たまり、凍ってるから氷つくれる？」とA児が友達を誘いかける。「先生、カップほしい」「このままごとのカップを使ってもいい？」と思いつきの容器を見つけてきた。園庭の椅子の上に置くA児、保育室前の廊下に置くB児、靴箱の上に置くC児、みんなそれぞれが違う場所に置く。「どうしてみんな置くところが違うの」と投げかける。



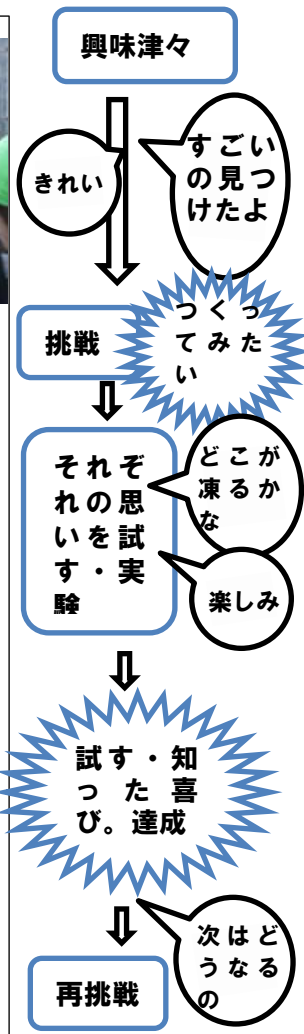
「ここのほうが早く凍るから」と互いに思ったことを出し合う。

「なんで置いた所が早く凍ると思うの」と聞いてみる。A児「外に置いてたら冷たい風いっぱいあたるからいい」、B児「廊下は雨にぬれないし、日にあんまりあたらないから凍る」、C児「下より上の方が寒いと思う」と、どうしてその場所に置いたか教えてくれた。



「どの場所が早く凍るか楽しみだね」と声をかけ、毎日凍るのを楽しみにしていた。

数日後、登園した子どもが外に出していた水が凍っているのを発見し、「外に置いてくのが一番早く凍った！」とみんなで喜んだ。「外の方がよく凍っている」と歓声を上げ「じゃあ、外だったらどこでもいいのかな」と保育者の声かけに興味津々の子どもたち。その日から影になる所、太陽が当たる所、階段の一番上の所など、それぞれが自分の思いを持って置く場所を考えていた。そして、「氷のたこやきをつくろう」「豆腐をつくろう」と卵パックや豆腐パックなど型のおもしろさにも興味を持つようになっていった。



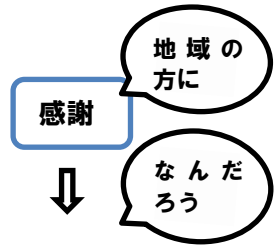
《考察》

A児は、自然に氷ができていのに興味を持ち毎日水たまりやタライにたまっている水を覗いて楽しみにしていた。“自分で氷をつくってみたい”という思いに他児も共感し、氷づくりを始めるが一人一人凍ると思う場所が違い、一人一人の思いを保育者が共感しながら聞いたことで、子どもたちもみんなの考えを認め、それぞれの水が凍るのを楽しみにできることにつながった。友達の思いを受け入れたり、認め・認められたりする姿に成長してきたからこそいろいろな案を試す事ができたと感じる。また、その後、外に置いていた水が凍ったことについて「風が冷たいから」「夜、真っ暗になっているから」と空気や気温などみんながわかっていったことで、次につなげる環境も大切である。子どもの心に届く、誘いかけるものが必要であると感じた。

5 歳 児

事例④-1 タケノコ PART1 **フツフツって何になる?** (4月)

4月の半ばに地域の方から大、中、小のタケノコを頂いた。初めて見る子どもも多く、「これはお父さんタケノコ! こっちは赤ちゃんタケノコや」と大きさを見て喜んだ



り、「こっちは軽々やで!」「これは抱っこしないと持てないわ」と重さ比べをしたりしていた。タケノコをじっくり見ながら「なんかいっぱい毛が生えてるなあ。フワフワしているよ」「なでると気持ちいいわ」と話していると「このブツブツ何やろ?」とA児が言う。「なんか色すごいなあ」と他の子もタケノコの下の赤いブツブツを触



ったり、じっと見たりしながら疑問がでてくる。子どもたちが不思議そうに見ている姿に共感し、「何だと思っ?」と投げかける。みんなで考えると①ブツブツからまたタケノコがでてくる、②ブツブツが種になって芽が出る、③根っこが出てくる、と3つの考えがでてくる。「本当は何になるのか不思議だね」と色々な考えに共感しながら話し合っていると「ぼく、タケノコが生えてる所を見たことある」「生えてるの見たら



分かるかなあ。見に行きたい」と子どもたちの気持ちを受けとめて後日、園の近くの竹やぶに行くことにした。タケノコは生えておらず「タケノコないなあ」「ほんまに竹になるのかな」と残念そうにしていたが、「見て。竹からいっぱい根っこみみたいなやつ出てる」「タケノコのブツブツと違うけれど似てる」と気付いたことを話していた。

不思議

おもしろい

興味

何か知りたい

探求

みんなで考えよう

もっと知りたい

ほんとなかな

ワクワクする発見

やったあ

《考察》

初めてタケノコを身近で見たり、触れたりする子どもも多く、形や色などのタケノコ独特の特徴に関心を持っていた。特に目立った根の赤いブツブツした形状は子どもたちに異様なものに映っていたようである。子どもたちの「何か知りたい」という気持ちを受け止め散歩に行ったことで疑問の答えにはつながらなかったが、より探求できるきっかけとなった。



事例④-2 タケノコ PART 2 やっぱ大きいほうが多い (4月)

後日、「タケノコ、スーパーで黄色くて白くなって袋に入れて売っていた。」とA児がスーパーでタケノコを見つけたことを知らせてくる。「そうだね、むいて売ってるね」とA児の気付きを受け止めてうなづく。そばにいたB児、C児が「タケノコってむいたら白いの?」「どれくらいむいたら黄色いような白いのになるの?」と興味をもって話しかけてきた。「茶色い皮むくとなるよ」とA児が



B児に伝える。「じゃあ、一番小さいタケノコをむいてみよう。小さいから早くむけんじゃない?」とB児が提案する。するとC児が「大きくなっても小さくても皮の数変わらいのと思う」「数が増えるんじゃないくて皮が大きくなると思う」と大きいタケノコを指さして皮が大きいことを知らせる。

「ほんとうに数が変わらないのか変わるのか分からないね」

家庭での経験

知っているよ

好奇心

話す。聞く

本当?

興味

確かめたい

とB児、C児の思いに共感し、「どうしよう？」と投げかける。

A児が「みんなでむいてみたいな」と思いを伝える。A児、B児、C児の思いをみんなに伝える時間をつくり、みんなで大、中、小のタケノコをむくことになる。「大きいタケノコは、やっぱり皮が大きいね」「小さいタケノコは皮小さいけどいっぱいむかないといけないよ。」「見て、むいた皮クルンってなって角みたい」「フワフワしている」「段々になっていくよ」と言いながらむいている。「ほら、タケノコの匂いがしているよ」と両手を広げて匂いを嗅いでいる。

全てのタケノコをむき、それぞれのタケノコの皮を並べてみる。「1・2・3……。いっぱいすぎて数えられない」「でも、見たらやっぱり大きいタケノコが一番多いよ」



探求

大変だけど

心地よいしんどさ

満足・充実

《考察》

タケノコの赤い根や皮に細かい毛があることや皮が丸まっていること、段々になった形など見たり触れたりすることで発見や気づきがたくさん見られ、タケノコに対しての興味が広がってきていた。タケノコを身近に見る経験の有無で皮をむいたらどうなるかの想像が様々で一人一人の声を拾いクラスみんなで考える機会をつくった。皮をむく経験から数に興味をもただけでなく、大きさを比べたり、皮の特徴から角に見立てて遊んだり、友達と自分の思いを出し合いながら楽しむことができた。また、地域や保護者の方にクラスだよりなどで子どもの様子を知らせていったことでたくさんのタケノコの協力が得られ、自分たちで遊びをつくることができた。

事例④-3 タケノコ PART 3 どっちが高いかな？(5月)

タケノコの皮をむいたり、タケノコ汁・タケノコごはんなどごちそうづくりに使ったり、いろいろな遊びに使った。

後日、「見て、でっかいタケノコ持ってきたで」とA児が家の近くの竹やぶから大きくなったタケノコを持ってきた。A児が持ってきたタケノコを見て「下の方緑色になってる」「ぼくより背が高いかも」と背比べが始まった。「前見たタケノコもこんなに長くなるねんなあ」「どこまで高くなるんやろ」とみんなで話しながら「海まで行けるかな？」と以前読んだ「ふしぎなたけのこ」の絵本を思い出して言うB児「みんなだったらどこへ行きたいの？」と問いかけると「私は氷の国まで行きたい」「ぼくは宇宙まで行く」と楽しそうな表情で話していた。

翌日、子どもたちが話していたお話の絵をかいた。「下のところは紫色のところもある」「皮の先は緑の葉っぱが出るよ」とタケノコを観察しながら描き、「お空の上までタケノコが伸びて雲のお城に行くよ」「タケノコが伸びて折れてジャングルに着いたよ」と自分のイメージしたタケノコが伸びた絵を夢中で描いていた。友達とかいた絵を見せ合う中で「すごく上手だね」「本物のタケノコみたい」と互いの良さを認めていた。



匂い・感触

タケノコの興味の継続

自分との比較・疑問

大きいな。どれくらいになるのだろう。

イメージを豊かにする

色んな思いがあるね。友達のおもしろそう

創造と想像・認め合う

《考察》

タケノコの特徴を発見したり、竹に変化するおもしろさに触れたり、見たり、遊びに使ってきた。また、保育者は子どもたちが楽しんでいる気持ちに共感し、遊びの振り返りで、「たけのこほり」や「たけのこぐんぐん」「ふしぎなたけのこ」などのタケノコが出てくる絵本を読んできた。背くらべをして自分の背丈よりもこれから伸びていくタケノコが竹に生長することを身近に感じたことで「ふしぎなたけのこ」のお話の世界を自分に置き換えて楽しむことができた。



事例⑤-1 トカゲ PART 1 **あなたはだあれ** (5月中頃)

保育室にトカゲが入ってきて、「何かいる!」「わぁ見てすごい」「キャ〜こわい」など子どもたちの声が飛び交う中「飼いたい。一緒にいたい」「捕まえよう」という声があったので、虫かごに入れた。A児が「この子トカゲ?」「トカゲかな、でも他にも似ているのいないかな?」と問いかけ図鑑を置いておく。図鑑を見ていたB児が「トカゲに似たので、カナヘビっていうのもいるみたいやで」C児は「ほんまや、よく似ている」と図鑑に載っているカナヘビとトカゲの写真を見比べている。B児が「トカゲは肌がツルツルしていて、カナヘビはザラザラしているみたい」と言うと、C児も「すごい!トカゲはしっぽが切れてもまた生えるみたいやで」D児は「すごいな」とトカゲの特性にも気づき驚いている。A児「赤ちゃんトカゲはしっぽが青色しているみたいやで」何人かの子どもが「見たことあるわ」「ぼくも」「きれいかったで」と言いながらみんなで肌の表面やしっぽを見たり触ったりして考えた。C児「肌の色はちょっとネズミ色やからトカゲかな」B児「顔は三角やからカナヘビのような気もするな」A児「でも体の模様が図鑑に載っているトカゲと一緒にやからやっぱりトカゲやわ」クラスの間みんな「確かに」と言うことで「トカゲちゃん」と名前が決まった。保育者が「トカゲは何を食べるのかな?」と問いかけると何人かの子どもたちは図鑑で調べることになった。「生きた虫を食べるって」「蚊とかアリかな?」みんなでわかったことを出し合っていた。保育者が「みんなで生きた虫採れる?」と子どもたちに問いかけた。生きた食べ物をあげ続けられないので、迷いはあったが子どもたちの飼いたい・一緒にいたいという気持ちに共感し、クラスで飼うことにした。

珍しい生き物の発見・興味・知りたい

ドキドキする

良く観る

なんか、ワクワクしてきたよ

友達と知っていることを出し合う

飼いたいけど、心配。次へのステップ

《考察》

偶然部屋に入って来た珍客に子どもたちが、喜んだり、驚いたりした。その中で図鑑を見てトカゲやカナヘビがいることを知ったり、食べ物や特性を知ったりできた。初めは怖くて近寄れなかった女兒達も「よく見るとかわいいね」と親しみが持てるようになった

事例⑤-2 トカゲ PART 2 **トカゲちゃんは何が好き** (5月中頃～7月)

数日後、トカゲのために生きた虫を捕まえるのに夢中のB児が「あつ蚊、採れたのに潰れた」A児「アリ採れたよ。食べるかな」保育者は、子どもたちの一生懸命にする姿を見て、大きな興味を持ち、心が動いたことにすごいと感じながらも「食べてくれる

世話をすることで愛着と親しみ

と良いね。」と見守った。B児「みんな見て、アリまだいるわ。好きじゃないんだね」と図鑑を見ながら「バッタやカマキリが好きって書いている」「バッタいるかな」と不安になりながらもみんなで探しに行くがいなかった。保育者は、飼いはじめて2週間が経ち水以外なにも食べていないのでどうしようか迷いながらトカゲの痩せている状態を知らせクラスで話し合いをもち、このまま飼うか逃がすかを決めることにした。「お腹が空いてかわいそう」「でも飼ったことがないからずっと見ていたい」「何を食べるか知りたい」「トカゲちゃんにも家族がいるかも」などの意見が出たが、①エサ取りを頑張る。②毎日さみしくならないように声をかける。③当番が霧吹きをする。みんなの思いが一致したので、みんなで力を合わせて飼うことを決めた。A児「そら組トカゲちゃんは他にも好きかもしれないからいろいろな食べ物を試そう」その日から毎日、画用紙に試した食べ物を書くことにした。ヨモギ、ヤマモモ、テントウムシ、アブラムシ、シロツメクサ、ヘビイチゴ、などを入れたがどれも食べなかった。A児「なんか痩せてツルツルしていた肌がカサカサになってきた感じがする」B児「待っていてや。バッタ絶対に捕まえるから」C児「みんな、そっと来て、水飲んでるよ。舌でベロベロして飲んでる」B児「かわいいな」と、ニヤリと笑顔で友達に話しかけていた。



6月初旬、バッタを捕まえた。C児「いっぱい食べて」と3匹入れた。次の日、B児が、大きな声で「いない、バッタいないよ」と言うと、A児が慌てて駆け寄り「食べたんだ。ちょっと太った感じがする」「あ、今、目が合った。きっとお礼を言っているのと違う?」「先生もそんな気がするわ」と子どもたちの喜びに共感する。最初、虫に触れられなかった子どもたちは、虫かごをもつ役、虫を見つける役、つかまえる役に分かれて捕り、他のクラスに虫捕り名人がいるので「どう捕ったらいいの」と教えてもらったりしてどんなに暑くても頑張っていた。金曜日になると、2日間「何も食べられないからたくさん入れとくね」と他のクラスの子もともたちもバッタを捕まえるのに協力してくれた。B児が「トカゲちゃんと名前を呼ぶと隠れていても出てくる」と嬉しそうに話すとA児も「ほんとうや」とクラスのみんなで大喜びした。

7月、夏休みの間、保育者が飼うことにしようか、逃がそうかなど、色々葛藤したあげく、夏休みの間トカゲちゃんの食べ物をどうするか子どもたちに決めてもらうことにした。「虫捕れないから、さみしいけど逃がしてあげよう」とみんなが決めた。

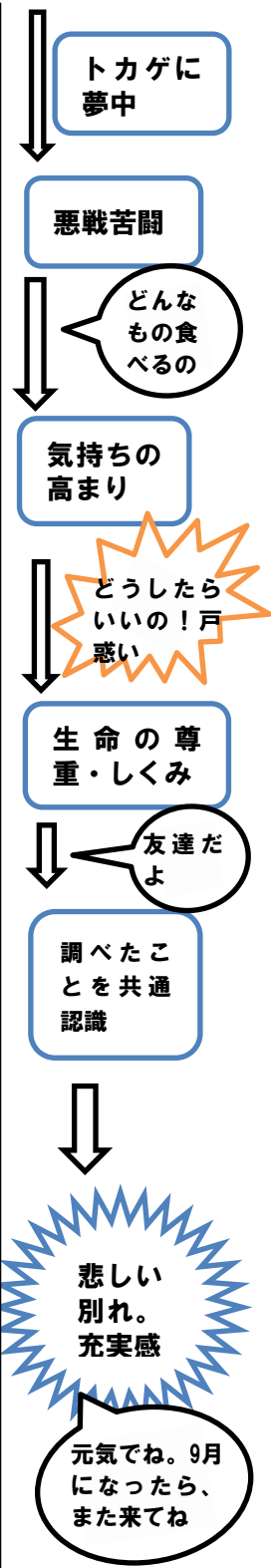


7月19日の終業式の日「また遊びに来てね」と言いながら逃がした。

《考察》

図鑑にトカゲの好物は載っている。しかし、季節的にバッタがおらずクラスみんなで考え、草や木の実などの食べ物を探した。だんだんと痩せて艶がなくなってきたトカゲを見て命について考え始めた子どもたち。自分たちだったら、こうしてほしい事を考え実践した。毎日の声かけ、きれいな水、霧吹きなど1日も欠かさず頑張ることでトカゲが警戒しなくなった。

保育者は、食べ物がなくて逃がそうか、続けていこうかと何度も迷い、戸惑いながらも子どもたちの

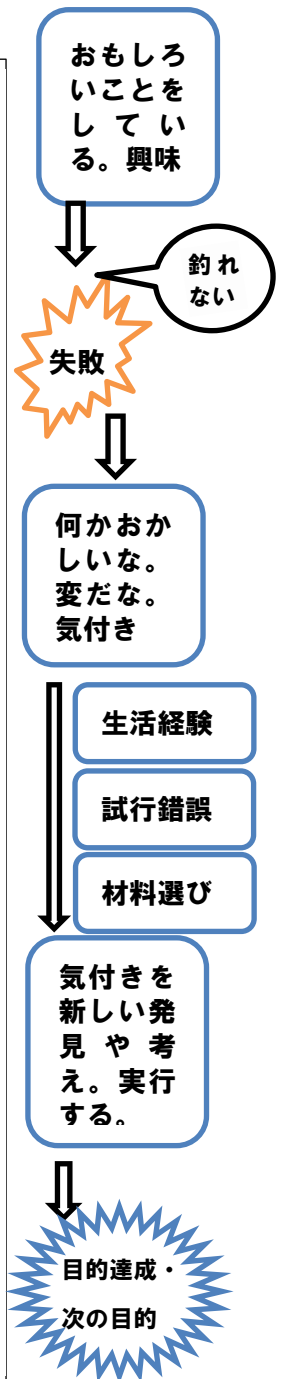
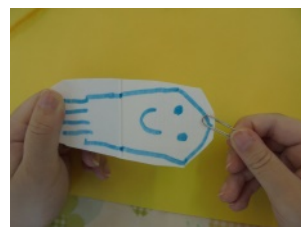


興味の大きさと探求心や好奇心を大事にしようと飼育していくことにした。子どもたちは、この経験を通して、トカゲの生態に興味を持ったり、何冊もの図鑑を見て、より詳しく調べたり、トカゲを飼育するためには、生きた虫をあげなければならないという自然の命の循環について知り考えたりした。また、トカゲの食べ物を取りたいという思いから怖くて、触れなかったバッタに触れたりとクラスみんなで力を合わせていった。

子どもの探求や興味、好奇心など、今後、どのようにつながっていくか生き物の命をどのようにつなげ考えていくか、保育者としての感覚と感性を高めていくことが大切だ。

事例⑥ **どうしたら釣れる**(6月～7月)

A児が、水に入ったタライに葉っぱなどいろいろな物を浮かべて遊んでいたことがきっかけで魚釣りが始まった。発砲トレイ・ペットボトル・牛乳パックなどの素材を使い魚をつくった。魚を釣るため、割り箸に毛糸やリボンをつけ、先に自分たちで好きな大きさに切った磁石シートをつけ、ゼムクリップをつけた魚を釣り始めた。「魚が取れない」「むずかしいなあ。くっつかない」と悪戦苦闘している。保育者は、「どうして釣れないんだろうね」と疑問を投げかける。B児は、「浮いているのは、すぐにくっつくのに水の中に沈んでいる魚は取れない」「浮いている魚を釣りたいの?」と聞くとC児は「魚は水の中にいるから水の中の魚を釣りたい」D児が、「魚が大きいから重いのと違う?魚を小さく切って釣ってみる」というアドバイスを聞いてその通りに釣る。何回かは釣れるが釣りにくい様子。C児は、「クリップが小さいからくっつきにくいのかも」と魚に磁石をつけ、磁石と磁石で試してみる。「水の中だとくっつくんだけど、水から出たときにははずれる」と困っている。「磁石以外につる方法はないかな?」とさらに問いかけると、縁日でヨーヨー釣りを経験した子どもが「針金みたいなものを曲げて釣ったらいいねん」と教えてくれる。そこで、子どもたちと一緒に針金を探し、何種類か用意する。やわらかい針金、太い針金の中から、やわらかい針金を選び、好きな長さに切り、その先を曲げて竿をつくった。A児、B児は「クリップに針金をひっかけるのが難しいな」他の子も「ひっかけるのが大変やな。なんか手がプルプル震える。でも、なんだかおもしろいな」とひっかかると確実に釣れることに満足している。楽しそうに魚釣りをしている様子を見て、4歳児も「入れて」とやってくる。つくり方や釣り方を教えながら一緒に楽しんでいた。



《考察》

磁石の特質やおもしろさが伝わるようにしたかったが、保育者の材料の準備が不十分であったことから、子どもたちの思いが違う方向にってしまった。しかし、子どもたちのもっと遊びを楽しみたい、おもしろ

ろさを追求したいという気持ちが、いろいろな素材の魚をつくったことから、ものの浮き沈みに気付くことができた。水中から、水の上に出る時に魚が外れてしまうことに気付き、水の中の魚をどうすればうまく釣ることができるか考え、工夫していった。

子どもの生活経験からの言葉をきっかけに何度も何度も挑戦できる時間を確保したり、友達同士で情報交換をしたりできる場をつくったことで遊びが展開した。自分たちで遊びをつくったという気持ちが満足感と自信につながったと考えられる。

また、上手くできたことで自信をもち、心のゆとりができたように思う。困っている4歳児や友達にやさしく教え、一緒に遊ぶことができた。

事例⑦ 指に力入れて巻くわん！（6月）

保育室で好きな遊びをしている時、絵本を読んでいたA児が「先生、これ全部、新聞でつくってるんだって」と新聞でつくった棒でジャングルジムのような物をつくっているのを見せる。そばで制作遊びをしていたB児、C児は、A児の見ていた絵本を覗きにくる。「新聞でできてるってすごいな」「おもしろそう」と話しながら「先生、新聞ある？作ってみる」と興味を持っている姿に共感しながら新聞を用意し、みんなで作ることになった。

「いっぱい棒つくろう」A児が巻き始めた様子を見てB児、C児が真似て一緒に棒をつくり始めた。その様子を見て他の子どもたちも一緒に巻いていく。「いっぱいできたからつなげていこう」と棒と棒をくっつけて持つ役とガムテープでとめていく役に分かれてつなげていく。絵本と似た形になり、「できた」と完成を喜び、立体の中を体を小さくして通っていく。「なんか迷路みたいやな」と一人が通り終わる頃、体が当たった所の棒が折れたり、つなぎ目でまがってしまい倒れてしまう。「あああ、こわれちゃった」「なんで倒れるのかな」と残念がる。「どうして倒れちゃったのかなあ」と一緒に考える。「ガムテープのつけかたかな」と思い、もう一度強くつけたが、それでもうまくいかない。「棒の立て方かな」という風になっているのかと絵本をじっと見ているA児。「もうちょっと大きくしようか」と角度を広げ大きくて広い三角形の形にして「中が通れるようにトンネルみたいにしたい」と、角度や棒の長さ、広さ、棒の立てる位置などに気付いて「もう一回したいな」「僕通ってへんから通ってみたい」ともう1回始めからつくり始める。「一緒にみんなでがんばってみよう」と励ます。つくっているとB児が巻いた何本かの棒を振りながら「先生、こっちの太い棒の方がフニャフニャしている」と細い棒と太い棒を比べて気付いたことを話す。一緒にしていたC児も「ほんとうだ、細く巻く方がいいのかな、太い方が強そうやのに」とみんなで細く巻けるようにつくり始める。「なかなか細くならない」「難しいな」と困っているとA児が「指にギュって力入れて巻いていったら細く巻けるよ」と教える。細い棒の方がしっかりすることに気付いた子どもたちは「さっきより細く巻けた！」「ほんとうだ、なかなか曲がらない」ともう一度できた棒をつなぎ始めた。「つなぎ目のガムテープをもっとちゃんと巻かないとあかんのかな」「ガムテープいっぱい巻いたら重いからと違うかな？」と棒と棒のくっつけ方の工夫も考えていった。

絵本との
出会い

やって
みたい

できる
かな

よし、
やろう

試してみ
る・失敗

なんで
だろう

できるま
で再挑戦

保育者や
友達の認
めと励ま
し

ここも
考えて
みよう



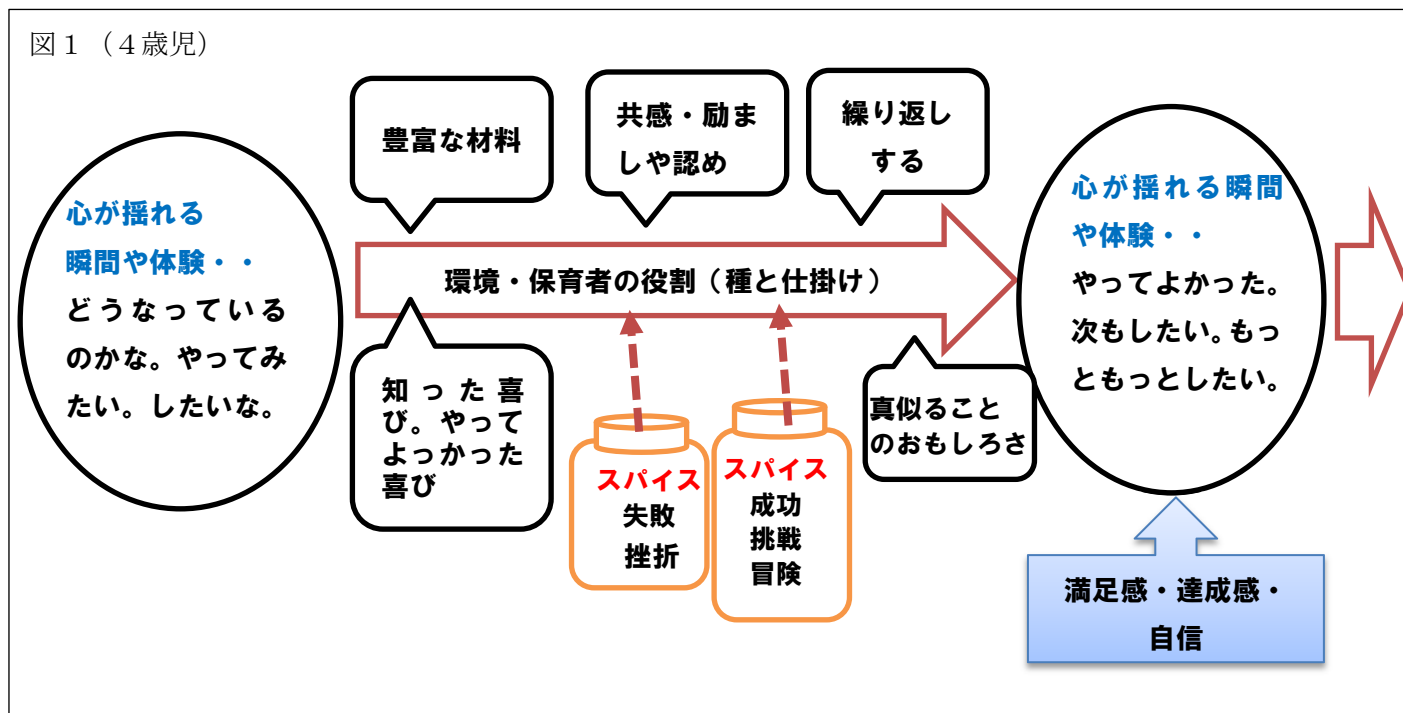
《考察》

ふと目にとまった一冊の本、身近にある新聞をつなげることで、おもしろい遊びに変わること気付く。1度作ったものの壊れてしまい、“でも作りたい”という気持ちを保育者も一緒に考え、もう一度挑戦することで、棒の長さやバランス、角度の違い、立つ位置、新聞の巻き方で強度が変わることに気付き、また、どうしたら固く巻けるかを子ども同士で共有したことで一緒に完成につなげることができたと考える。

(中 略)

4 実践から学ぶ

- 子どもは、おもしろそうなものやことを見つけると、目をキラキラ輝かせ声のトーンも大きくなり夢中になって遊ぶ。遊びをつくっている。その姿を実践から分析してみると下記の図1・2のようになる。



- 4歳児にとって、何気ない生活のひとこまや遊びの中で「あっ！おもしろい」「ふしぎ！！」と心を揺れる瞬間に出会う。それは、偶然であったり、真似から入ったりすることもある。

その感動体験と感情体験が「あれ、どうなっているのかな？」「やってみたい」という探求心につながっていく。その時に、保育者が共感したり、励ましたりすることと、気付いた環境をタイミングよく用意したりといった“種と仕掛け”が4歳児の遊びを展開していく。

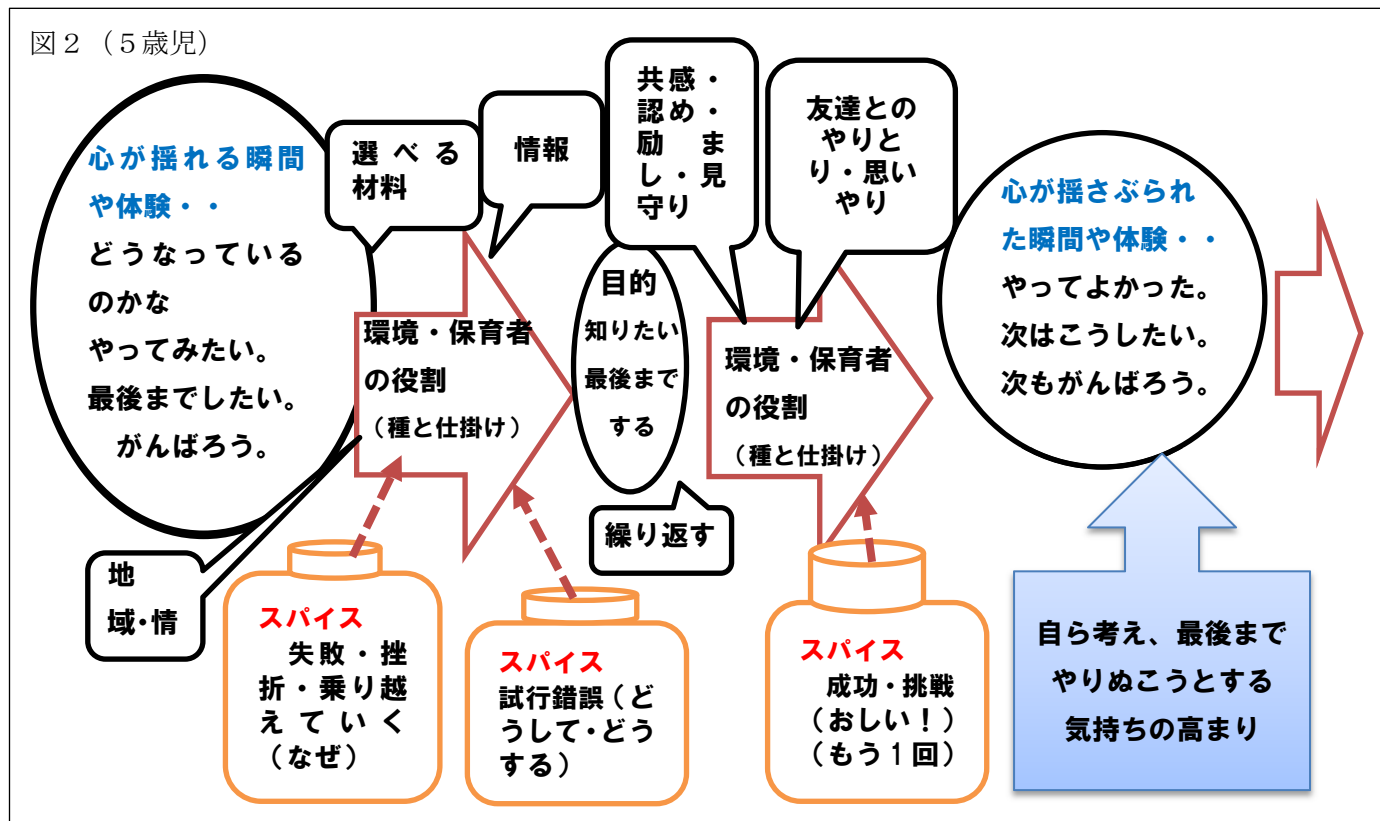
夢中になって遊ぶ中で、4歳児は、おもしろいと思うことを何度も何度も繰り返したり、失敗を経験したり、自分なりに考えたり、試したりする。失敗したり、もう少しという成功がスパイスとなり遊びが持続する。

すなわち、本園の目指す「自ら考え、最後までやりぬく子ども」につながっていくと考える。

そして、「やってよかった」「おもしろかった」と達成感と満足感を得る。その時こそ自信となり次の遊びにつながっていくのである。



図2 (5歳児)



- 5歳児になると、遊びの中でワクワク・ドキドキする心を揺れた瞬間に出会うと「おもしろい」「不思議」「どうなっているのかな」「最後までやりたい」「こうしたい」と、好奇心や目的が生まれる。4歳児の時の経験が生かされたり、幼稚園のことをお家の人や地域の人に話したり、聞いたり、本で調べたり、友達と試したり、考えたりなど試行錯誤しながら目的に向かって進んでいく。保育者は、共感したり、励ましたり、気付きにつながる声をかけたり、場や空間・時間を大切にしていける。この環境と保育者の役割が種と仕掛けとなり、子どもの遊びの展開を一押しすると考える。遊びの中では失敗し乗り越えることや「もう少しでできる」という経験がスパイスとなり「わかった」「できたー」「やったー」という目的に向け挑戦し、達成感・満足感や自信を得る。そのことが「もっとやってみよう」「こうしたらどうなるのかな」「さいごまでしてみよう、したい」と次の目的を見つけ、また、遊びをつくっていくと考えられる。

このように、本園の目指す「自ら考え、最後までやりぬく子ども」に結びつくと考えられる。

- 目的に向かって子どもは、自ら考え、試し、試行錯誤しながら何とか達成しようと夢中になる。その時に、保育者が後一押しのスパイスが必要であると考えられる。そのスパイスは、甘い時も苦い時もおいしい時もあり、様々なスパイスであり、保育者だけでなく、子ども同士もそんなスパイスが必要であると感じた。種と仕掛けのような隠し味を持つ保育者でありたい。
 - 職員間で保育を振り返り、活動の流れの中で「ここでどんな風に感じているのか」「こんな環境と保育者がかかわっていったら違う遊びになっていたのではないだろうか」「欲張りすぎたかな。引っ張りすぎたかな」「この時にこんな風にしたから良かった」と学び合う機会となった。
- このように、子どもの心が揺れ動いた瞬間の表情や言葉を逃さず、見えてくると、次にどんな環境を

用意すべきか、また、どんな保育者の言葉かけや援助が必要か意識できるようになってきた。

職員間で「やってみたい」「最後までしたい」と思う環境と保育者の役割を具体的に話し合えるようになり、具現化していくことで子どもだけでなく保育者も保育を楽しめるようになった。

5 課題と今後の方向性

ポカポカと気持ちの良い天気。保育室で好きな遊びを楽しんでいる時間。A児が大型積み木の上に1か所太陽の光が強く当たっているところを見つけた。「見て、ここだけめっちゃめっちゃ明るい」「手の影ができるで」と光の所に手をかざしていた。保育者も一緒に見に行き、「ほんとだね、どこからこの光入ってきているんだろ」とA児の発見に共感すると、周りにいた友達もA児の驚きに共感し、手を光の所に置いてみる。一緒にいたB児が「なんかここあったかいで」と気付く。今まで光の所に手をかざしていたA児や他の子どもたちもその声を聞いて触ってみる。「ほんとや、あったかいなあ」「光が当たってないところは、こっちより冷たいなあ」と触り比べていた。



上記のエピソードのような子どもたちの姿は、当たり前のように流れてしまう、ふとした瞬間の芽生えた驚きと気付きである。この子どもたちの発見を保育者がどう受け止め、どのように感じるか。感覚と感性を研ぎすませるかと思った。

このことは、保育者だけではなく、地域の方や保護者を含めた全ての大人が同じ思いにたたなければならない。探求心や好奇心、判断力などを培い、生活を切り開く力となる「科学する心」を育むことが必要であると感じている。

そのために、当園では、掲示板や地域への回覧ニュース【六条ニュース】ホームページなどでポートフォリオを活用し、もの・ひと・ことにかかわり、子どもが輝いている瞬間や夢中で遊び込んでいる様子、自分たちで遊びをつくっている様子を発信している。子どもの姿こそ、説得力、納得力があるということを信じ、今後もみんなで子どもの育成に力をいれていきたい。

研究代表 香川 幸美

研究者 永井 美希 本間 展子 加藤 百合 木村 麻希 檜尾 弘江 村田 一彦